

# 保育者養成校で学ぶ学生の「学力観」に関する考察

## —「学力観」からみた教育方法の検討—

浜野 兼一

Hamano Kenichi

キーワード：保育者養成、学力観、学習指導、教育方法

### はじめに

本研究は、保育者養成校で学ぶ学生に対する適切な学習指導の方法を模索するため、学生の学力観をめぐる諸状況のデータ収集や分析などを通して考察するものである。

保育者養成校で学ぶ学生には、保育の専門領域に関わる知識や技術などとともに、現場で活用できるコミュニケーション能力や創造力、他者と連携・協力する能力などが求められている。これらの諸事項とともに、自ら学び考える姿勢や学びに対する意欲、批判的思考力なども不可欠の要素であろう。こうした諸力の重要性については、専門職に係る国家資格を認定する文部科学省<sup>1</sup>、厚生労働省<sup>2</sup>もほぼ共通の認識を持っている。その一方で、前述の諸力の育成は、それを根本で支える「学力」によって補完される。

「学力」については、学校知<sup>3</sup>学力、新しい学力観<sup>4</sup>、PISA型学力<sup>5</sup>、確かな学力など、様々なとらえ方がある。本研究の調査対象の学生に照らし合わせてみると、上記のなかでは「確かな学力」が検討テーマに最も近い<sup>6</sup>。

「確かな学力」とは、基礎的・基本的な知識や技能をベースとした思考力・判断力・表現力であり、さらにこれら全体を「学ぶ意欲」によって包含する学力のとらえ方である。

各学校は、児童・生徒に「確かな学力」をはぐくむために、授業改善や教科外の教育活動の活用、土曜日授業<sup>7</sup>の推進などの取り組みを行っている。そして、学校教育の場に提起されている様々な課題を考えると、現場教師が児童・生徒にどのようなやり方で「確かな学力」をはぐくんでいくかは、重要なテーマといえよう。

大切なことは、このテーマが、学校教育の場だけのものではなく、就学前保育においても不可欠なテーマなるということである。なぜなら、就学前保育が適切に展開することを前提として、「確かな学力」が唱えられているからである。つまり、「確かな学力」の基礎、芽生えをはぐくんでいく、という役割が保育者にあるといえよう。

変化の激しい時代にあって、保育の場、学校教育の場において様々な変化がみられるように

なっている。このことから、保育の場や学校の授業等でこれまで用いてきた方法では、乳幼児、児童・生徒との関わりで、困難な状況も発生している。こうした問題に適切に対処するためには、養成校の学生の学力観や指導者としての学力に対するとらえ方<sup>8</sup>の検討が不可欠であり、それをふまえた学生への教育方法の見直し、構築が必要と考える。

以上により、本研究では、これから求められる保育者の姿を考察するため、保育者養成校で学ぶ学生の学力観テーマとして、それに関わる学生への調査を通して浮かび上がった諸相を検討し、学生に対する教育方法の改善や充実化への道筋を探る。

## 1. 研究の目的

保育者養成校で学ぶ学生への学習指導の方法を検討するために、学生の、これまでの学び(小中学校、高等学校)や経験などとも関連づけをはかりながら、「学力観」をテーマとして考察する。

## 2. 研究の方法

保育者養成校で学ぶ学生の視点や考えを幅広くとらえるために、設定した質問に対する自由記述方式で調査を行った。

質問項目は①「『学力』とは何ですか? 簡潔に書いてください」、②「あなたは、これまで何によって『学力』を身につけてきましたか? 自由に書いてください」の二つを提示し、学生に回答を求めた。回答の結果については、記述内容の分析により諸観点の把握を試みた。

## 3. 対象

A県私立保育者養成校1年生21名

## 4. 調査時期

平成27年5月に、口頭で質問項目を提起し、調査の理由・目的・動機などについて説明を行った。口頭による説明とあわせて、黒板への表記も行い実施した。質問項目への回答が完成するまでの所要時間は25分程度。

## 5. 倫理的配慮

調査の目的、個人情報の守秘の誓約、調査は無記名で実施し回答は任意であること、また、回答用紙を配布する際に、調査によって得られたデータは今回の研究以外の目的で使用しないことを口頭で説明した。この手続きを踏まえて、合意が得られ協力可能な学生のみ調査の対象とした。

## 6. 結果と考察

今回の調査で得た「保育者養成校で学ぶ学生の学力観」についての自由記述の内容の概要と記述内容を分析した結果及び考察を以下に示す。

### 1つ目の質問

①「学力」とは何ですか？ 簡潔に書いてください。

質問紙の回収数：21

回収した質問紙（21枚）の記述内容については、どのような語句により「学力」が表されているか、という点をとらえたい、という意図から、記述中に使われている同一語句の出現数に着目し分析を試みた（表1）。

表1 語句の出現数

キーワード	出現数
頭	5
力	5
能力	4
必要	3
良さ	3
考える	2
自分	2
上	2
生きていく	2
勉強	2

（※出現回数2回以上を序列化）

語句の出現数をみると、「頭」「力」を最上位に「能力」「必要」「良さ」といったものが続いている。しかし、これら個別の語句の出現状況は、記述の中からの抽出になるため、回答者の学力観をとらえるためには、別の角度からの検討も必要となる。

そこで、回答者の記述を再度注意深く読み込んでいくと、語の表記は違うが、意味するものは同じ、というものも散見されることがわかった。これを踏まえて、表1の語句を整理すると、「頭」と「力」の上位2語の他の語句との結びつきがより明確となった（表2）。

表2

「頭」	「 <u>頭の良さ</u> 」「 <u>頭</u> がいいか悪いか」「 <u>頭</u> がいいやつはえらい」「 <u>頭の良さ</u> 」「 <u>頭の良さ</u> 」
「力」	「 <u>生きていくのに必要な力</u> 」「 <u>考える力</u> 」「 <u>大切な力</u> 」「 <u>学習能力</u> 」「どれだけ理解できるかの <u>能力</u> 」「 <u>能力</u> をはかるもの」「 <u>学ぶ力</u> 」「生きるための <u>能力</u> 」「 <u>考える力</u> 」「 <u>回転力</u> 」

以上から、質問①の回答結果からみえてくる学力観は、自由記述に記された表記という限られた条件ではあるものの、「頭」「力」といった語とむすびつく、いくつかの語句、表現によってかたちづけられているといえよう。これに加えて、次の点も今回の分析で明らかになった記述内容の特徴である。それは、「頭」と「力」が直接同居した記述になっていない、という点である。確かに、回答者の記述の際に用いる語の意味合いやニュアンスの違いは含まれていると考えられるが、「頭」と「力」が直接関連づけられていない、という状況は、今回の調査における学力観の検討に何らかの示唆を与えていると思われる。

## 2つ目の質問

②あなたは、これまで何によって「学力」を身につけてきましたか？

質問紙の回収数：21

この質問の回答の分析にあたっては、記述内容を注意深く読み込んだうえで、記述されたすべての語句を対象として、類似の語、関連の深い語を整理しグループ分けした。なお、グループ分けを行う際、当該グループにおける語の出現数の合計を付した。

表3 記述された語句の分類

分類	備考	出現数の合計
授業、教科、学校等グループ	授業7 教科5 国語7 英2 国2 数学2 英語1 算数1 学校10	37
学校外活動等グループ	活動3 ボランティア1 野外活動1 自然学習1 体験学習1	7
「覚え」「学ぶ」「教え」等グループ	覚え1 学ぶ 教え3 勉強2 宿題1 予習1 復習1	10
先輩、後輩、人間関係等グループ	関わり2 先輩、後輩4 対人、人間関係3	9

時間、社会、ルール、道徳等 グループ	時間6 社会5 ルール4 道徳4	19
-----------------------	------------------	----

次に、表2の語句出現数分類表の状況をより明確にするため、グラフ化（図1）して各グループの比率を視覚的に表してみた。

図1 グラフでみた記述された語句の分類状況

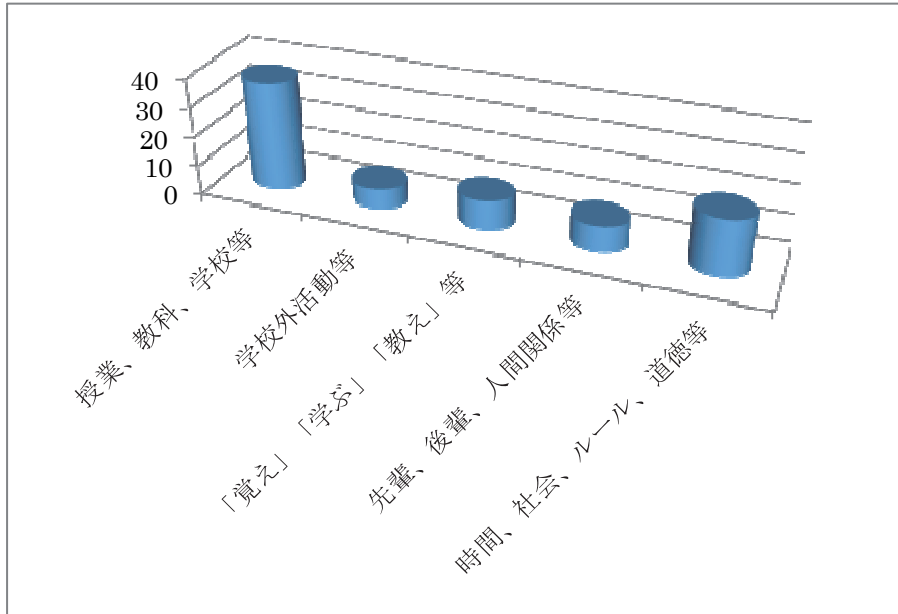


表3、および図1から、記述における出現語句は、「授業、教科、学校等」に分類されるものに最も多く集まることとなった。その一方で、分類比率の第2番目に「時間、社会、ルール、道徳等」がきている。「授業、教科、学校等」は、学校に限定されるものであるが、「時間、社会、ルール、道徳等」については、学校以外のフィールドにもおよぶものといえよう。つまり、質問②の回答内容からは、学校の枠を超えたところに「学力」獲得の拠り所を求める傾向もみられるのである。

次に、分類比率の第3番目となった『「覚え」「学ぶ」「教え」等』については、学力を身に付けるための手段、方法に関するものであるが、関連語句の数もそれほど多くない、という結果となった。分類比率の状況は、このあとに「先輩、後輩、人間関係等」「学校外活動等」と続く。

ここで、最も比率の低い「学校外活動等」に着目してみると、「学校外」における諸活動、ボランティア活動、野外活動、自然学習、体験学習といった諸活動が、少なくとも、今回の回答者からみた場合、学力を獲得する教育的活動として、それほど強く認識されていないといえるのではないだろうか。

## 7. 学生に対する教育方法の一試案

以上、本稿では、保育者養成校で学ぶ学生に対する適切な学習指導の方法を模索するために、『学力』とは何ですか？ 簡潔に書いてください、および「あなたは、これまで何によって『学力』を身につけてきましたか？自由に書いてください」の二つの質問に対する自由記述という手続きによって、学生の学力観についての分析、考察を行った。本節では、記述の分析、検討のまとめとして、次のような点から考察を試みた。

【養成校の学生に、どのような教育方法によって「確かな学力」を養うのか】

「確かな学力」は、養成校の学生が備えるべき必須項目であり、それを身につけてこそ園児に「(確かな学力の)芽生え」をはぐくむことができるといえよう。この点をふまえたうえで、質問②からみえてくる「学生が自覚できる学力の獲得状況」を「確かな学力」の各項目にあてはめてみた(表4)。

表4 「確かな学力」と質問②の記述の関連づけ

「確かな学力」	質問②(記述の例)
基礎的・基本的な知識	座学系の数学では公式をとにかく覚え、問題をやり込むというふう身につける。／それぞれの教科の予習や復習。
基礎的・基本的な技能	授業などで教えられるだけでなく、自分でやってみる、参加すること。／教科、活動、そろばんで頭で計算式が浮かぶようになった。
思考力	
判断力	
表現力	
学ぶ意欲	意欲、つまり、やる気にさせること。応援や支え。／日々の積み重ね。

上記から、質問②の記述内容を関連づけることができない項目(「思考力」「判断力」「表現力」)がウィークポイントと考えられる。この点に留意して、望ましい教育方法を考える必要がある。ここでは、表4で明らかとなったウィークポイントに焦点をあて検討する。

「確かな学力」の中の「基礎的、基本的な知識、技能」や「学ぶ意欲」は、その多くの部分が、「個」に帰するものである。しかし、「思考力」「判断力」「表現力」といったものは、「個」という限られた状況では十分にはぐくめない。なぜなら、「思考力」「判断力」「表現力」は他者との関わりにより、教育的成果や効果が表出するからである。

では、どのような教育的アプローチにより、「思考力」「判断力」「表現力」をはぐくめばよい

のであろうか。図2に教育方法の具体案を例示する。

図2 「思考力」「判断力」「表現力」をはぐくむ教育的アプローチ

案① 体験活動から得たものを自分自身のなかで振りかえり、教育上適切と思われる事柄を選択し、なんらかのかたちで表現する

案② 資料等に表記されている内容の主要な部分を選び、他者にわかるように説明する方法を考える

案③ 取り組むテーマが提示されているグループ学習等で、グループ内の意見、考えを相互にとらえ、グループとしての意見、考えをまとめあげグループ独自の方法で発表する

上記のポイントでは、各案それぞれに、「思考力」「判断力」「表現力」のすべてを盛り込んでいる。

これらの教育方法を、保育者養成校の授業等でどのように使うかは、取り上げるテーマや内容によって様々であろう。実践的な学びを通して、養成校の学生が「確かな学力」への理解を深めることは、保育の場をより良い環境に変えていくきっかけにもなるといえよう。

注

<sup>1</sup> 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』 平成20年7月 38～39頁。

文部科学省は、「教師の役割を果たすために必要なことは、幼稚園教育の専門性を磨くことである。その専門性とは、幼稚園教育の内容を理解し、これらの役割を教師自らが責任をもって日々主体的に果たすことである。つまり、幼児一人一人の行動と内面を理解し、心の動きに沿って保育を展開することによって心身の発達を促すよう援助することにある。そのためには専門家としての自覚と資質の向上に教師が努めることが求められる」という見解を示している。

<sup>2</sup> 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 『保育所保育指針解説書』 平成20年4月 13頁。

『保育所保育指針解説書』には、「『専門的な知識・技術』をもって子どもの保育と保護者への支援を適切に行うことは極めて重要ですが、そこに知識や技術、そして、倫理観に裏付けられた「判断」が強く求められます。日々の保育における子どもや保護者との関わりの中で、常に自己を省察し、状況に応じた判断をしていくことは、対人援助職である保育士の専門性

として欠かせないものでしょう」と記されている。

- 3 森上史朗、柏女靈峰 『保育用語辞典』第8版 366～367頁。同書では、学校知について、『学校知』ということばの意味については、その定義や認識が定まっているわけではなく、そのとらえ方には幅がある。たとえば、それを文部科学省が決めた学校で教えられる教科内容とするもの、または、いわゆる日常知識と対立してとらえられる、シンボル操作によって学習される科学的知識とするもの、あるいはそれをもっと広くとらえ、子どもが学校生活を通して結果的に身につけてしまっている行動様式とするものなど」としている。
- 4 1989（平成元）年改訂の学習指導要領以降登場した学力観で、「知識・理解」に加えて「興味、関心、意欲、態度」といったものを学力の要素と考える。
- 5 OECD（経済協力開発機構）による「PISA : Programme for International Student Assessment」を指し、学力を、単に知識の習得と再生の力とせず、学習者が身に付けた知識等をどれだけ応用できるか、によって判断しようとするとらえ方。
- 6 「確かな学力」は、義務教育段階の課題のひとつである「生きる力をはぐくむ教育」や、就学前の各園に求められている“生きる力の芽生え”をはぐくむ保育とも、密接にかかわっている。
- 7 文部科学省は、「学校、家庭、地域の三者が連携し、役割分担しながら、学校における授業、地域における多様な学習や体験活動の機会の充実などに 取り組むことにより、土曜日の教育環境を豊かなものにすることが必要」として、土曜日授業の推進を掲げている。
- 8 学生の学力観の特徴を浮かび上がらせるために、指導側の学力に対する理解、とらえ方を検討することも必要と考える。